



「だ、大丈夫？」

そんな少女が瞳を潤わせ、心配している。チワワのような愛くるしさを前面に出して。

大樹は少女を見やった後、ポツリと呟いた。

「香水くっさ……」

刹那、少女のラリアットが大樹の首に炸裂した。

「あんだとテメエ……！」

「うぐおう!？」

又しても痛みで意識が遠のきかける。少女とは思えない怪力に翻弄される中、大樹は自嘲気味に笑った。

「どうやら自分には女運がないらしい、と。」